

平家物語と前兆

暗示の二重構造

楊 夫 高

要 旨

本文対『平家物語』中の預兆性事件の描写方法及其作用进行了论述。

「覚一」版本中描述的六个预兆性事件 A～F 均是以占卜文来暗示故事情节发展的。笔者认为其中 B 与 C D、E F 分别构成了双重的暗示结构。围绕该双重暗示结构，本文对『平家物語』中具有代表性的十三个版本进行了分析和探讨，从而得出 各版本在描写 B、即「旋风事件」时，已经确定了 B～F 的整体的暗示结构，并为了该暗示结构的形成，确定了「旋风事件」中占卜文的各项要素。B 与 C D、E F 的双重暗示结构，并不是『平家物語』各个版本的共同特征，而是「覚一」等五个版本的特有结构。

キーワード……暗示 解釈者 時間の改变 二重構造

はじめに

『平家物語』は時々前兆的な記事を用いる。物語はこれらの前兆的な記事を通して、物語の行方をほのめかし、物語を進めていく⁽¹⁾。このような手法に対して、富倉徳次郎は『平家物語』が、ある大事件を語るにあたって、そのことの前兆を示す事件をまず書いて、一つのサスペンスをまず用意して話を進めるといふ方法は、たびたび採られている」と指摘する⁽²⁾。

ところで、前兆的な記事には、「解釈者」（物語に陰陽師や博士などとして記されているが、本論では一括して「解釈者」と呼ぶことにする）が登場してくることが多い。「解釈者」の登場とそとの占いにより、一見すると、年代記的な記事と見えるものが、前兆的な機能を担って、物語の展開にかかわるようになる。

覚一本『平家物語』（小学館、新編日本古典文学全集、市古貞次校注『平家物語』による）の前兆的な記事において、「解釈者」が登場して占いを行うのは六つの場面である。それは、

- A、嘉応三年の山鳩の死（巻一 鹿谷）
 - B、治承三年五月の辻風（巻三 辻風）
 - C、治承三年十一月の大地震（巻三 法印問答）
 - D、治承四年五月の鼬の騒ぎ（巻四 鼬之沙汰）
 - E、治承四年、馬尾に鼠が子を産んだこと（巻五 物怪之沙汰）
 - F、元暦二年三月のいるかの奇瑞（巻十一 遠矢）
- である⁽³⁾。

この六つの場面は、いずれも重大な社会的事件ないし不思議な記事を記してから、「解釈者」が登場し、直面する異常現象を対象として占いを行う。その結果、出された「解釈」が一つも漏れなく後の物語で実現する。「解釈者」の占いにより、その異常現象が意味するもの、或いは、作者がその異常現象に与える意味が明らかにされ、占文の内容に導かれながら物語が進行するのである。

本稿では、このような前兆記事が、単一の関係で仕組まれているのではなく、二つの前兆記事あるいは二段階で前兆が仕組まれて、一つの後の重大事件が実現するように書かれているのではないかとこのことを述べたい。

まずは右にあげた六つの例について、前兆と物語展開との関連を確認する。

一 覚一本における前兆記事

A、嘉応三年の山鳩の死

新大納言成親卿も、ひらに申されけり。院の御気色よかりければ、さまざまの祈をぞはじめられける。八幡に、百人の僧をこめて、信読の大般若を七日よませられける最中に、甲良の大明神の御前なる橋の木に、男山の方より山鳩三つ飛び来ッて、くひあひてぞ死ににける。鳩は八幡大菩薩の第一の仕者なり。宮寺にかかる不思議なし」

とて、時の検校、匡清法印、此由内裏へ奏聞す。神祇官にして御占あり。「天下のさわぎ」とうらなひ申す。「但し君の御つつしみにあらず、臣下の御つつしみ」とぞ申しける。

（巻一 鹿谷 『平家物語』 六七頁）

占文は臣下の慎みだと断定し、後の物語の展開で藤原成親の過分の振る舞いを意味するものであることが分かる。そして、成親の野望が平家討伐計画の鹿谷事件へ展開することを暗示する⁴。

B、治承三年五月の辻風

同五月十二日午剋ばかり、京中には辻風おびたしう吹いて、人屋おほく顛倒す。風は中御門京極よりおこッて、未申の方へ吹いて行くに、棟門平門を吹きぬいて、四五町十町吹きもてゆき、けた、なげし、柱などは、虚空に散在す。檜皮、ふき板のたくひ、冬の木葉の風に乱るるが如し。おびたしうなりどよむ音、彼地獄の業風なりとも、これには過ぎじとぞみえし。ただ舎屋の破損するのみならず、命を失ふ人も多し。牛馬のたくひ、数を尽くして打ちころさる。是ただ事にあらず、御占あるべしとて、神祇官にして御占あり。

「今百日のうちに、祿をおもんずる大臣の慎、別しては、天下の大事、並びに、仏法王法共に傾いて、兵革相續すべし」とぞ、神祇官、陰陽寮、共にうらなひ申しける。

（巻三 辻風 『平家物語』 二二五頁）

傍線部の占文の「医師問答」に記される重盛の死(巻三)は「法皇被流」(巻三)、「源氏揃」(巻四)、「宮御最後」(巻四)は「三井寺炎上」(巻四)、「法皇被流」(巻三)は「源氏揃」(巻四)、「宮御最後」(巻四)を暗示する。⁵⁸⁾

C、治承三年十一月の大地震

同十一月七日の夜、戌剋ばかり、大地おびたしう動いてやや久し。陰陽頭安倍泰親、いそぎ内裏へ馳せ参つて、「今度の地震、占文のさす所、其愼かるからず。当道三経の中に、根器経の説を見候に、年をえては年を出でず、月をえては月を出でず、日をえては日を出でずとみえて候。以ての外に火急候」とて、はらはらとぞ泣きける。
(巻三 法印問答 『平家物語』 二三八頁)

占文は「大臣流罪」及び「法皇被流」との二つの大事件を暗示すると思うが、「法皇被流」の本文に、「去七日の夜の大地震もかかるべかりける先表にて…理かなとぞ人申しける」という記述があり、大地震が「法皇被流」の前兆であると明言しているのので、「法皇被流」に重点が置かれていると思われる。

D、治承四年五月の鼯の騒ぎ

同五月十二日、午剋ばかり、御所中にはいたちおびたしうはしりさわぐ。法皇大きに驚きおぼしめし、御占形をあそばいて、近江守仲兼、其比はいまだ鶴藏人と召されけるを召して、「この占形もつて、泰親がもとへゆけ。キツと勘へさせて、勘状をとつて参れ」とぞ仰せける。仲兼これを給はつて、陰陽頭安倍泰親がもとへゆく。をりふし宿所にはなかりけり。「白河なる所へ」といひければ、それへたづぬゆき、泰親にあつて、勅定のおもむき仰すれば、やがて勘状を参らせけり。…法皇これをあけて御覽すれば、「いま三日がうちの御悦、ならびに御歎」とぞ申したる。

(巻四 鼯之沙汰 『平家物語』 二八二頁)

占文の「御悦」は、同章段に記される鳥羽殿から法皇の幽閉が解かれることを、「御歎」は、同章段に記される高倉宮の謀反が露見したことを暗示する。

E、治承四年、馬尾に鼠が子を産んだこと

其外に一の厩にたてて、舎人あまたつけられ、朝夕ひまなくなかではれる馬の尾に、一夜のうちに、ねずみ巢をくひ、子をぞうんだりける。これただ事にあらずとて、七人の陰陽師にうらなはせられければ、おもき御つつしみとぞ申しける。この御馬は、…名をば望月とぞつけられたる。陰陽師安部の泰親給はりけり。…昔天智天皇の御時、竜の御馬の尾に、一夜の中に鼠巢をくひ、子をうんだりけ

るには、異国の凶賊蜂起したりけるとぞ、日本紀には見えたる。

（巻五 物怪之沙汰 『平家物語』 三六一頁）

占文の「おもき御つつしみ」とは、次の章段「早馬」に記された頼朝の旗挙げのことを暗示する。「異国の凶賊蜂起」という、故事引用によつても明らかである。

F、元暦二年三月のいるかの奇瑞

又源氏のかたよりいるかといふ魚二千はつで、平家の方へむかひける。大臣殿これを御覽じて、小博士晴信を召して、「いるかは常におほけれども、いまだかやうの事なし。いかがあるべきとかんがへ申せ」と仰せられければ、「このいるか、はみかへり候はば、源氏ほろび候へし。はうでとほり候はば、みかたの御いくさあやふう候」と申しもはてねば、平家の舟の下をすくにはつでとほりけり。「世の中はいまはかう」とぞ申したる。

（巻十一 遠矢 『平家物語』 三七八頁）

傍線部の占文と、いるかは「平家の舟の下をすくにはつでとほりけり」という描写と照らし合わせ、源平合戦の決定戦である壇浦合戦における「平家の滅亡する運命」を暗示する。

まとめ

右に確認したように、A 山鳩の死、D 鼯の騒ぎ、E 馬尾に鼠が子を産んだこと、F いるかの奇瑞などの動物の異常現象、及び B 辻風、C 大地震などの自然の異常現象は（以下これらの前兆的な意味を付与されて記される事件を「異常現象」とする）、それ自体の描写のみならず、「解釈者」の登場とその占文を加えることによつて、大事件の発生を暗示するようになる。

二 異常現象および「解釈者」の描写

この六つの異常現象の描写は、いずれも人々を不安にさせる話として取り上げられ、その「異常さ」、「恐ろしさ」、「重大さ」を強調的に伝えている。しかし、その記述の繁簡も絡んで、大きく二つの傾向が認められる。

《B 辻風》を除く五例は、異常現象の描写がごく簡略であり、暗示する事件が単一ではつきりして、前兆を示してから早い段階で予測された事件が実現する。

《B 辻風》の自然描写は『方丈記』と関りのあることが従来よく言われている⁶⁾。辻風は、災害状況が具体的かつ詳しく記され、多数の陰陽師に占いを行わせ、複数の事件の前兆として描かれている。物語全体に関わる重要度が右の五例とは異なるように考えられる。

異常現象の描写の後、いずれも慎重な受け止め方が描かれ、「解釈者」が登場して占いを行う。「解釈者」の占いにより、異常現象

象の記事は、事件の前兆として物語の展開を導くことになる。「解釈者」の登場は、記事の前兆的な役割を果たすには不可欠な要素となる。

『平家物語』は、暗示する事件により、「解釈者」の登場を意図的に描きわけている。

《B》以外の異常現象における「解釈者」は、それぞれ神祇官、一人、七人として記されるのに対し、《B》は「神祇官、陰陽寮共に」と記し、両役所ともに驚かされて占いを行うといつほど、《B》の重要性を強調し、《B》が暗示する事件の重大さを、際立たせる効果を狙っている。

三 《B 辻風》における時間の改変及び暗示範囲

右に検討した通り、この六つの異常現象において、辻風が重要視され、特別に取り扱われている。一体辻風はどんな役割を果たしているのだろうか。

この辻風が記録類に 治承四年四月二十九日 と記されているのを、『平家物語』は一年はやめて 治承三年五月十二日 のこととして書いたのである⁽⁷⁾。それは重盛の死の前兆を示すための改変だと、諸先行文献は指摘している⁽⁸⁾。

《B 辻風》における暗示のあり方を確認するため、次頁に表一（覚一本《B 辻風》における時間改変および暗示内容）を作成してみた。

このように整理すると、時間の改変で早くなった約一年の間に、「大臣流罪」、「法皇被流」、「高倉宮・源頼政謀反」などの、「天下の大事」といべき事件、「仏法王法の傾き」あるいは「兵革相統」といべき事件が多発していた。重盛の死だけではなく、この約一年の間に起きたこれらの事件の前兆を示すために、「辻風」の時間の改変を行ったのではないかと思われる。

次に前述した先行研究を踏まえ、辻風の暗示内容の対応を整理してみる。

「仏法の傾き」は、「三井寺炎上」のほか、「天下の衰微」を象徴するといわれる「奈良炎上」も、予測しているといえよう。

「王法の傾き」は、「法皇被流」のほか、「大臣流罪」、高倉天皇の讓位を記す「嚴島御幸」、福原遷都及び法皇が再び監禁されたと記す「都遷」などを指しているということができよう。

「源氏揃」及び「宮御最後」が「兵革相統」に関わることだが、巻六の「早馬」に記す頼朝の旗上げ、およびそこから始まる「源平合戦」も、「兵革相統」に暗示されている内容ではないかと思われる。

しかも、これらの事件はいずれも「天下の大事」といべきだろう。

辻風に関する占文は、暗示にとどまってい、具体的にどの事件をと、本当は特定できないものだろう。特定する必要もないのではないかとも思う。しかし、『平家物語』にあつては、「辻風」という章段以降、平家の王法仏法に対する悪行、反平家の動き、

辻風の時間の改変

表一 覚一本《B辻風》における時間改変および暗示内容

嘉応三年〜治承元年	「鹿谷事件」	
治承三年五月十二日	物語における《B辻風》	事件の前兆を示すBの占文
治承三年五月	「重盛熊野参詣」	大臣の慎
治承三年八月一日	「重盛の死」	王法の傾き
治承三年十一月	「大臣流罪」	王法の傾き
	「法皇被流」	王法の傾き
治承四年二月	「高倉天皇讓位」	王法の傾き
治承四年四月	「高倉宮・源頼政謀反」	兵革相続
治承四年四月二十九日	記録類における《B辻風》	
治承四年五月	「源氏揃」	兵革相続
治承四年五月	「法皇幽閉の解除」	王法の傾き
治承四年五月二十七日	「高倉宮謀反の露見」	兵革相続
治承四年六月二日	「三井寺炎上」	仏法の傾き
治承四年八月十七日	「都遷」	王法の傾き
治承四年十二月二十八日	「頼朝の旗挙げ」	兵革相続
……	「奈良炎上」	仏法の傾き
元暦二年三月	……（源平合戦）	兵革相続
	「壇浦合戦における平家の滅亡」	兵革相続

事大の下天 ii

及び源平合戦など、占文の予言に当たるような事件が相次いで記されていく。
 とすると、作者は「辻風」をもって、重盛死後の物語の行方をほのめかし、物語の全体的な展開を示そうとしているのではないだろうか。

四 《B 辻風》と ACDEF との暗示関係

前兆的な役割を果たしているこの六つの異常現象であるが、辻風とその他では物語上での役割が異なると考えられる。いった

いどのような位置関係にあるのだろうか。

表二(覚一本 B CD B EF の暗示関係)をもとに見直してみよう。

A は暗示内容が独立していて、B との関わりが考えられない。よって以下の考察では省くことにする。

表二に示したように、C の「法皇被流」とDの「法皇幽閉の解除」はBの「王法の傾き」に属し、Dの「高倉宮謀反の露見」、Eの「頼朝の旗挙げ」、Fの「壇浦合戦における平家の滅亡」はBの「兵革相続」に入る。しかも、CD EF が暗示する内容はいずれも「天下の大事」というべきである。

表二 覚一本 B CD B EF の暗示関係

《B》占文				大臣の慎	天下の大事	法皇被流	法皇幽閉の解除	高倉宮謀反の露見	壇浦合戦における平家の滅亡	
F	E	D	C							
《B 辻風》				大臣の慎	天下の大事	法皇被流	法皇幽閉の解除			壇浦合戦における平家の滅亡
				大臣の慎	天下の大事	法皇被流	法皇幽閉の解除			壇浦合戦における平家の滅亡

とすると、Bの時間が一年早まることにより、Cの暗示内容もBの暗示内容に入れられ、C D E F が暗示する内容は、すべて《B辻風》の暗示内容に含まれているといえよう。

「王法の傾き」にかかわる最も重大な事件といえば、物語上は「法皇被流」という大事件になると思われる。「法皇被流」をめぐって、C大地震 は法皇幽閉、D 鮎の沙汰 は幽閉の解除を暗示する。

「源平合戦」という、『平家物語』にもっとも大きく取り上げられている「兵革相統」の類の大事件において、それぞれE Fをもつて、頼朝旗挙げ及び平家の滅亡を暗示し、「源平合戦」の終始に関心を寄せ、占いを通して平家の運命を伝える。

《B》は、「辻風」という大きな自然災害を対象に、重盛の死を暗示すると同時に、「法皇被流」「源平合戦」を含む、重盛死後の物語の全体的な展開を暗示し、複数かつ重要な前兆的な役割を担わせている。「法皇被流」「源平合戦」のような重大な事件において、物語はまた C D E F をもつて直接的近接的な前兆関係を設定したのである。

覚一本は、前兆記事《B》において、広い範囲の複数の事件を暗示し、細部には、また C D、E F によって、短い範囲の単一の暗示を設けている。C D、E F は《B》に含まれている。覚一本の暗示構造は、単一ではなく、B C D、B E F によって、二重構造となっている。

このような二重構造は、『平家物語』の基本的な構造なのか、

それとも覚一本の独自の構造なのだろうか。主要な諸本の検討によつて考察を進めたい。

諸本は、語り物系の百二十句本（新潮日本古典集成）、流布本（桜楓社）、屋代本（新典社）、中院本（未刊国文資料及び国会図書館蔵本の複写）、国民文庫本（国民文庫刊行会）、竹柏園本（天理図書館善本叢書）、平松家本（古典刊行会）、読み物系の延慶本（勉誠出版）、長門本（国書刊行会）、源平盛衰記（早稲田大学出版部）、および四部合戦状本（汲古書院及び「文学」一九六六年十一月号。なお、『訓読四部合戦状本平家物語』を参照した）、源平闘争録（講談社学術文庫）を対象とする。

五 諸本検討の結果

覚一本を含め、十三の諸本における異常現象の記事を検討した結果、私見によれば、四つのグループに分けられると思う。（源平闘争録は、対応部分が欠巻のため、Aしか見つからなかった。ここでは外すことにする）

暗示の二重構造を持つグループ

覚一本、百二十句本、流布本、竹柏園本、平松本の五本である。

竹柏園本のEの占文の要素は覚一本と同様であるが、引用故事は、「異国凶賊蜂起亦帝無程隠サセ給ケルトソ日本記二八見タリケル」と記し、頼朝の旗挙げのほか、天皇の死（。）をもほめか

していると思われる。二重暗示構造の形成に支障はない。他は覚一本とほぼ同様の記述である。この五本は、B C D B E F という暗示の二重構造を持っているといえよう。

B C D との対応関係が不完全なグループ

屋代本、中院本、国民文庫本の三本である。《B》は「王法仏法の傾き」に言及しない。「王法の傾き」をめぐる B C D との二重暗示構造が崩れるようになる。

B E F との対応関係が不完全なグループ

延慶本、源平盛衰記の二本である。Eの記事の取り扱いが覚一本と異なる。「兵革相続」をめぐる B E F との二重暗示構造が崩れている。

二重の暗示構造が形成されないグループ

長門本、四部合戦状態の二本である。長門本は、Cが前兆機能ない、Eの取り扱いが覚一本と異なる。四部合戦状態はB、Eの前兆機能が明らかではない、Dの記事がない。よって、B C D B E F との二重暗示構造が完全に崩れている。

、 、 について、具体的に見てみよう。

のグループについて

屋代本、中院本、国民文庫本の三本である。C D、E F の占文と暗示機能は、覚一本と同様である。(10)《B》に含まれる要素が の場合と異なる。

神祇官ニシテ御占アリ。今百日ノ内ニ、禄ヲ重フスル大臣ノツツシミ、其後天下大ニ乱テ、兵革兵乱相続スヘシト神祇官、陰陽寮共ニ占申ケリ。(屋代本・B)

屋代本の占文の要素を、覚一本における《B》の占文の要素と照らし合わせてみると、はあるが、天下の大事、

仏法王法の傾きがない。 は二重暗示構造と直接関わる要素ではないが、 が記されていないことにより、「王法傾き」の大事件・「法皇被流」をめぐる B C D の暗示関係が弱まっている。二重暗示構造が形成されていないと言えるだろう。

次に、中院本、国民文庫本の占文をも見てみよう。

これた事にあらずとて、しんきくわんにて御つらあり、てんかのさはきとつらなひ申、たたしてうかの御大事にはあらず、しん(かの脱カ)つつしみとそ申、ことに ろくをもき大臣、百日のうちのつつしみ、へつしては、ひやうかくさうそくしてきらんあきらいのつつしみとぞ、しんきくかん、おんやうれうともにつらなひ申ける(中院本・B)

神祇官にて・御占あり・天下のさわぎと・うらなひ申す・但・朝家
 の・御大事には・あらず・殊には・禄をおもんずる・大臣・百日
 の内の・慎・別しては・兵革・相統して・飢饉・疫癘の・愁とぞ・
 神祇官・陰陽寮ともに・占申ける・（国民文庫本・B）

を持ち、が記されていない。屋代本と同様である。三
 つの諸本の占文とも、仏法王法の傾きが記されていない。よっ
 て、「王法傾き」の大事件・「法皇被流」をめぐる B C D と
 の二重暗示構造が崩れているといえよう。ところで、この二本は、
 波線部にあるように「飢饉・疫癘」をも占っている。の B には
 なかった別の要素とみるべきであろう。これについては、私の分
 けた別のグループ（延慶本など）にも、同じ要素がある。

のグループについて

のグループは、延慶本、源平盛衰記である。まず、延慶本の
 例を見る。Fは覚一本と同様であるが、B、C、D、Eが違つた
 で、具体的にみている。

延慶本、長門本二本は、巻三と巻四の双方に辻風が記される。
 巻四の辻風が、史実に近い治承四年二月「廿九」と記され、占文
 を記していない。巻三の辻風は、治承三年「六月十四日」と時間
 を改変し、占文を取り上げている。巻三の辻風は本稿が論じる二
 重構造に関わる《B》だと思われる。（11）

Bについて

「百日ノ内ニ大葬、白衣之怪異、天子大臣之御慎也。就中、重祿大
 臣ノ慎ミ、別八 天下大ナル怖乱、仏法王法共滅ビ、兵革相統
 テ、飢饉疫癘ノ兆ス所ナリ」ト、神祇官、陰陽師共ニ占申ケリ。（延
 慶本・B）

Bの占文を覚一本と比べてみる。延慶本の は覚一本のと
 共通である。の「仏法王法共滅ビ」は、覚一本の に当るが、覚
 一本の「仏法王法共に傾いて」に比べて、より強調した表現にな
 っている。を強調する傾向にあるのは、未法意識との関わりで
 注目してもよい。また波線の部分は、覚一本の占文にない要素で
 ある。

さし当り、延慶本のBは覚一本のBをより強めた形になってい
 て、さらに別の要素も加えた形になっていると判断できる。

Cについて

泰親重テ奏シ、申テ云、「当道三貴経ノ其ノ一、金貴経ノ説ヲ案ジ候
 二、年ヲ得テ年ヲ不出、月ヲ得テ月ヲ不出、日ヲ得テ日ヲ不出、時
 ヲ得テ時ヲ不出」ト申候ニ、是ハ、「日ヲ得テ日ヲ不出」ト見タル占
 文ニテ候。仏法王法共ニ傾キ、世ハ只今ニ失候ナムズ。コハイカガ
 仕候ハムズル。以外火急ニ見候ゾヤ」ト申テ、ヤガテハラクト泣
 ケレバ…（延慶本・C）

傍線部分の占文は覚一本のとはほぼ同様である。波線部分は覚一
 本にはない。延慶本Cの独自部分とみるべきだが、「仏法王法の

傾き」に言及することで、延慶本Bの「仏法王法の滅び」に呼応する。仏法王法の衰滅を改めて強調する働きがある。

Dについて

秦親、晴明相伝ノ種々ノ秘書ヲ開テ、ト巫シテ、打エミタル気色シテ申ケルハ、今三ケ日ノ中ニ御悦ト奉聞シ給ベキ由ヲ申ケリ。(延慶本・D)

覚一本のDは、「御悦」及び「御嘆」と二つの事柄を記しているのに対し、延慶本は「御悦」しか記していない。「法皇被流」をめぐる B C D との二重暗示関係に関わるのは、法皇の幽閉が解かれることである。よって、延慶本における B C D は、二重暗示構造を保っているといえよう。

Eについて

此入道ノ運命漸ク傾キ立シ比、家ニサマヅノ怪異共アリケル中ニ、不思議ノ事ノ有ケルハ、既ニ被立タリケル秘蔵ノ馬ノ尾ニ、鼠ノ巢ヲクヒテ、子ヲウミタリケリ。…入道大ニ驚テ、陰陽師七人ニ占セラレケレバ、各ノ「重キ慎」トソ申ケル。…昔天智天皇元年壬戌四月二、寮御馬ニ鼠ノスヲ食事有ケリ。其モ驚思召テ、御巫ナド被祈ケルニモ、「御慎不浅」ト申ケリ。サレバ彼ノ御代ニ奥セメナムド云事有テ、世中不静。其後幾程モナクテ、天皇モ崩御ナリテケリ。(延慶本・E)

Eの占文の要素と引用記事と照し合せて見ると、延慶本のE

は、旗挙げする頼朝を討伐する「奥セメ」と天皇の死を暗示すると思われる。しかし、この記事そのものの位置をみると、清盛死去のあとの回想談の中に位置づけられている。二重暗示構造に関わる頼朝の旗挙げの前兆としての機能がなくと読むべきであろう。よって、「兵革相続」の大事件・源平合戦をめぐる B E F との暗示関係が弱まり、二重暗示構造は成立しない。

以上のように、延慶本のB、C、Dは覚一本より「王法傾き」を強調しながら、B C D との二重暗示構造を保っている。しかし、Eが暗示する内容は覚一本と異なるため、「兵革相続」の大事件・源平合戦をめぐる B E F との二重暗示構造は崩れているといえよう。

源平盛衰記は、D、Fの占文と暗示機能が覚一本と同様であり、

B、C、Eは異なる。

Bについて

これ徒事に非ずとて御占あり。百日の中の大葬、白衣の怪異、又天子の御慎、殊に重祿大臣の慎、別しては天下大に乱逆し、佛法王法共に傾き、兵革打続き、飢饉、疫癘の兆なりと、神祇官並に陰陽寮共に占ひ申しけり。(源平盛衰記・B)

Bは、延慶本とほぼ同様である。但し、が「佛法・王法共に傾き」と記すので、延慶本よりも覚一本に近い。

波線の部分は延慶本と同様であり、覚一本の占文にはない要素

である。

Cについて

泰親、勅問の御返事には、三貴経の其一、金貴経の説に云ふ、去ぬる夜戌の時の地震、年を得ては年を出せず、月をえては月を出せず、日を得ては日を出せず、得ざるは時許りと見たり、其中に此は日を出ては日を出でずと候へば、遠くは七日、近くは五日三日に御大事に及ぶべし、法皇も遠旅に立たせ御座し、臣下も都の外に出で給ふべし、此事もし一言違ふ事候はば、御前に於て相伝の書籍を焼失ひ、泰親禁獄流罪、勅定に随ふべしと、憚る処もなく、泣くく奏聞しければ、旁御祈始められけり。（源平盛衰記・C）

十三の諸本のCにおいて、源平盛衰記だけは、「法皇も遠旅に立たせ御座し」（法皇被流）、「臣下も都の外に出で給ふべし」（大臣流罪）という二つの事件の前兆だと明言する。覚一本の「其慎かるからず」と記し、どの事件の前兆かと明言しない占文と異なるが、法皇被流をめぐる B C D との二重暗示構造を保っていると思われる。

Eについて

此入道の世の末に成つて家に様々のさとし有りき、坪の内に秘蔵して立飼はれる馬の尾に、鼠の、巢をくうて、子を生みたりけるぞ不思議なる…陰陽頭安部泰親に尋ね問はれければ、占文のさす処、重き慎とばかり申して、其故をば申さざりけり、内々人に語りけるは、**平家滅亡の瑞相既に験れたり、近くは入道の薨去、遠くは平家**

都に安堵すべからず、如何にと云ふに、子は北の方なり、馬は南の

方なり、鼠上るまじき上に昇る、馬侵さるまじき鼠に巢を作らせ、

子を生せたり、既に下剋上せり、されば子の北の方より夷競ひ上り

て、馬の南の方におはする平家の卿上を都の外に追落すべき瑞相と

こそ申しけれ、され共入道の威に恐れて、只重き御慎みと計り申し

たりければ…（源平盛衰記・E）

源平盛衰記のEは、清盛死去のあとの追悼説話群中に記され、一見して延慶本と同じ内容であるが、「**平家滅亡の瑞相**」「**既に験れたり**」「**近くは**」「**入道の薨去**」「**遠くは**」「**平家都に安堵すべからず**」と付け加えることにより、平家の都落ち及び滅亡の前兆だと明示する。源平盛衰記のEは、兵革相統の大事件・源平合戦をめぐる B E F との二重の暗示構造とは直接の関連がないと言つべきであろう。よって、源平盛衰記において、源平合戦をめぐる B E F との二重暗示構造が崩れているといえよう。源平盛衰記のEは、もつと検討すべき課題があるうと思われるが、さしあたり、私は「兵革相統」の大事件・源平合戦をめぐる B E F との二重暗示構造を検討するので、ここではここま

でにとどめたい。

延慶本、源平盛衰記におけるBCDは、覚一本と違いがあるにもかかわらず、「王法傾き」の大事件・「法皇被流」をめぐる B C D との二重暗示構造を保っている。

しかし、延慶本、源平盛衰記のEが違つ内容を暗示することにより、「兵革相統」の大事件・源平合戦をめぐる B E F との二重暗示構造は崩れている。

のグループについて

長門本、四部合戦状本の二本である。

長門本のB、E、Fは、前述の延慶本のB、E、Fとほぼ同様である。延慶本の検討を踏まえるなら、まず B E F の暗示の二重構造が崩れているといえよう。

Dは延慶本と同様に、「御悦」しか書いていない。しかし、Cの取り扱い違つので、具体的にしてみる。

Cについて

去七日の大地震はかかる不思議のあるべかりけるぜんへうにて、十六洛又の底までもこたへて、堅牢地神もおどろきさわぎ給ひけるとぞ覚えし、陰陽頭泰親朝臣はせ参て、なくく奏聞しけるもことわりなり、かの泰親の朝臣は、清明五代の跡をうけて天文のえんげんをきはめ…(長門本・C)

長門本のCは、法皇が鳥羽殿に幽閉される記事の後に、回想記事として取り上げられている。大地震が起きて、泰親が院に奏聞したことを記しながら、具体的な占文の内容に触れずに泰親を紹介する説話に移ってしまう。回想記事として記されるうえ、占文

も記さず、Cの暗示機能が認められない。B C D との二重の暗示構造も崩れている。

四部合戦状本のC、Fの取り扱いは覚一本とほぼ同様である。B、D、Eを具体的にみる。

四部合戦状本は、B「辻風」を、重盛の死、大臣流罪、法皇被流の後の治承四年四月「十日余比」と記し、記録類の「治承四年四月二十九日」に近いのである。覚一本は辻風を一年早い位置に動かすことにより、重盛の死、大臣流罪、法皇被流などを暗示する機能を持つようになることは、すでに述べた。四部合戦状本の位置では、これらを前もって暗示することはできない。

さらに、四部合戦状本の「辻風」の記述をみると、その終わりに「是非只事可然事里恠疑侍」と、何かをほのめかしているように書いているが、明らかに前兆ではなく、占いに関することにも言及がない。(12) 覚一本のBが複数の事件を暗示する占文を使っているのと比べ、はるかに違っている。

D 融の騒ぎという記事がない。(13) 「法皇被流」をめぐる C D の暗示構造が形成されていない。

Eは、延慶本、長門本と同様に清盛死去のあとの回想談の中に位置づけられている。Eの占文の要素は、延慶本と同じであるが、引用記事は、「天智天王元年^天四月鼠馬尾生子之事注日本記之承其時^其有占其世騒有」だけを記し、占文の意味を明かにするような記述がない。清盛死去のあとの回想談の中に位置づけられている

ので、頼朝の旗挙げの前兆としての機能が確実にはないといえよう。よって、E 頼朝旗挙げ、F 平家の滅亡という、「兵革相統」をめぐる E F の暗示構造が形成されていない。

右にみてきたように、四部合戦状本において、《B》は前兆記事として書かれていない。C D E F はいずれも不完全な形になっている。四部合戦状本は B C D B E F との二重の暗示構造が成立していないのである。

のグループに属する長門本、四部合戦状本は、一部の暗示機能が覚一本と同様であるにも関わらず、B C D、B E F との二重の暗示構造が完全に崩れているか、全く形成されていないといえよう。

まとめ

以上、覚一本を含め、十二の諸本における異常現象の記事 B C D E F を、具体的に検討してみた。諸本における暗示の形は様々ではあるが、B C D、B E F の対応関係から見ると、四つのグループに分けられると思われる。

六 二重暗示構造の構想

前節における異本検討の結果を、表三（15頁、各諸本における C D B E F の暗示関係）に示してみた。表三を見ると、グ

ループは、B C D、B E F との二重暗示構造が成立し、グループとは、片方の二重暗示構造のみが成立し、グループは両方とも成立していない。

この二重暗示構造において、暗示の起点となり、もつとも大きな範囲を覆い、二重構造の外枠ともいうべき《B》をさらに詳しく見てみよう。《B》は諸本によって占文中の要素に異同がある。

《B》の占文中の要素のあり方は、二重暗示構造のいわば内枠の形成に大きくかかわっていると思われる。《B》の要素を表四（16頁、各諸本における《B》占文の要素）に示し、表三と対照しながら検討を進める。

1、《B》の占文中の七つの要素

表四の通り、諸本から抽出した要素は、からまでの七つがあげられる。

覚一本に取り上げられているからまでの四つの要素については、第三、四節ですでに検討したが、改めてまとめると、は、「辻風」の時間を改変させる理由だと指摘される「重盛の死」、は、「辻風」の以降に記されるすべての大事件、は、B C D との二重暗示構造の外枠・「仏法王法の傾き」の類の事件、は、B E F との二重暗示構造の外枠・「兵革相統」の類の事件を暗示する。

この四つの要素は、いずれも物語の行方に大きく関わる暗示である。特に、とは物語の全体の構造に関わる重要な暗示を示

し、二重暗示構造の中心部分をなすと言っても過言ではない。
 覚一本に記されていない。を見てみる。は養和二年の飢
 饉・疫癘の前兆である。は、「嫡子惟盛、次男資盛、下向ニカ
 カリ給フ。岩田川ニテ二人ノ御息達ノ浄衣ノ色、重服ニカヘリ
 テ、河波ニゾウツリタル。」(延慶本)と、重盛の死の前兆として
 記される「白衣の怪異」のことを暗示する。は、高倉天皇の讓
 位を暗示する。

は、間接的に重盛の死を暗示し、より暗示効果が弱まって
 いる。が暗示するのは、大きな事件とはいえず、が暗
 示する事件の重要性に及ばないといえよう。
 2、《B》の要素と二重暗示構造の構想
 表四に示したように、それぞれが持つ要素により、諸本は四グ

表三 各諸本における B C D B E F の暗示関係(注: は「成立」、×は「不成立」)

グループ分け	B E F	B C D	十二の諸本 の暗示関係 B C D B E F
グループ			本一覚
			本句十二百
			本布流
			本園柏竹
			本松平
グループ		×	本代屋
		×	本院中
		×	本庫文民国
グループ	×		本慶延
	×		記衰盛平源
グループ	×	×	本門長
	×	×	本状戦合部四

表四 各諸本における《B》占文の要素

（注： ○は「有」、×は「無」、△は「有、且つ強調」）

天子之御憤	白衣之怪異	飢饉疫癘の愁	兵革相続	仏法王法の傾き	天下の大事	大臣の憤	各諸本の 《B》占文の要素	
							十二の諸本	
×	×	×						本一覚
×	×	×						本句十二百
×	×	×						本布流
×	×	×						本園柏竹
×	×	×						本松平
×	×	×		×	×			本代屋
×	×			×	×			本院中
×	×			×	×			本庫文民国
								本慶延
								記衰盛平源
								本門長
×	×	×	×	×	×	×	×	本状戦合部四

ループに分けられる。すなわち、四つの要素を持つ覚一本等五本のグループ、占文の要素が不規則で、他のグループに比べて少ない屋代本等三本のグループ、七つの要素を持つ延慶本等三本のグループ、全く要素のない四部合戦本である。屋代本、中院本、国民文庫本は一括できるかどうかためらわれるが、二重暗示構造に関わる を、この三本が共通して持たないことを重視したいと思う¹⁴⁸。

このように表四を整理した上で、表三を照らし合せてみると、表四による整理とそのグループ分けは、表三の整理とグループ分けに、ほとんど一致することになる。長門本については後に触れる。

表四と表三が重なるということは、二重暗示構造の形成ないし不成立には、《B》すなわち「辻風」に関する「占文」の記述が大きく関わっていることを意味するだろう。「辻風」をどのよう

に扱つか、どのように記述するか、という段階で二重暗示構造が構想されていたか、あるいは構想されていなかったか、というように考えられるのである。

全く要素を持っていない四部合戦状本は、他の諸本と違って、辻風の時間の改変を行っていない。史実通りの年次に辻風が記されてあり、暗示的な表現はあるが、具体的な事件に結び付けようとする機能は認められない。四部合戦状本を除く諸本は、年次の改変を行っている。年次を改変することに、暗示構造を設けようとする狙いを認めることができるだろう。

延慶本などの読み物系三本は、暗示的な要素を七つ記し、辻風に多くの事件の前兆としての役割を担わせようとしている。長門本は両方の二重構造が成立していないため、四部合戦状本と同じグループに入れられる。延慶本、源平盛衰記二本において、B C D との片方の二重暗示関係が成立するとはいえ、物語が強く二重暗示構造を構想していると考えられない。

屋代本などの三本は、B E F との片方の二重暗示構造を持ちながら、中院本、国民文庫本が延慶本などと共通的に持っているところから考えると、この三本は、覚一本の類と延慶本の類の中間に位置するものと言える。二重暗示構造の構想を持っているながら、不完全な状態であるといえよう。

終わりに

〔解釈者〕の解釈・すなわち占文で、事件の前兆を示す前兆記事に関心をもち、A〜F の六つの場面をめぐり、諸本にわたって検討してきた。

覚一本で認められる二重暗示構造・B C D B E F を構成する B〜F は、諸本において、四つの暗示構造の形になつてしまう。私見では、諸本は辻風を記す際に、B〜F の暗示構造の形を定めた上で、その占文の要素を決めていた。B C D、B E F との暗示の二重構造は、『平家物語』諸本にわたつての基本的な構造ではなく、覚一本などの五本の独自の構造であると見るべきであろう。

注

(1) 山本唯一は、易経とのかかわりで、これらの前兆記事を論じている。(『易占と日本文学』清水弘文堂 昭和五十一年五月)。

(2) 富倉徳次郎『平家物語全注釈上巻』五五四頁 角川書店 昭和四十一年五月。

(3) 巻十二の「大地震」に記される元暦二年七月の大地震において、博士の登場 「天文博士ども馳せ参つて、『よさりの亥子の刻には、かならず大地うち返すべし』と申せば、おそろしな子どもおろかなり。」「(『平家物語』四四一頁)という場面があるが、この地震は平家の怨霊と結びつけて書かれ、前兆的な記事ではないので、A B C D E F のグループから外すことにした。

- (4) 梶原正昭は、「成親の野望が大きな騷擾事件へ展開することを暗示するものとして注目すべきであろう」と指摘する。(『鹿の谷事件』一〇三頁 武蔵野書院 平成九年六月)。
- (5) 佐々木八郎をはじめとする諸研究者の指摘による。佐々木八郎『平家物語評講上』(三七七頁 明治書院 昭和三十八年二月)の他、水原一『平家物語上』(二五〇頁 新潮日本古典集成 昭和五十四年四月)、御橋徳言『平家物語略解』(藝林舎再版昭和四十八年八月)、福田晃他『平家物語上』(三弥井書店 平成五年三月)を参照したが、ほぼ同様の指摘である。
- (6) 佐々木八郎は『方丈記』の文章と内容とを『平家物語』が資料にし、文章までこれを踏襲したものであることは動かせない」と断定している。(『平家物語評講上』三七七頁)。
- (7) 『玉葉』『百鍊抄』などの記録類は、いずれもこの辻風に相当するものを治承四年四月二十九日の事としている。
- (8) 辻風における時間の改変は、辻風の事を以下に述べる重盛の薨去という事件の前兆として考えると考えられると、富倉徳次郎は指摘している(『平家物語全注釈上』四五七頁)。生形貫重は、「重盛の位置づけは、この作品の成立・構想論の根幹にかかわることであり、各人物論についても重要なものとなる」と、重盛の人物造詣の重要性を示し、早川厚一は、「多くの諸本は、平家の運命が尽きたことを示す嚆矢として、この重盛の死をあげる。この後、運命の尽きた平家は、衰滅への道を歩むことになる」と、重盛の死の記述の意義を指摘している。
- (9) 『四部合戦状本平家物語評釈』(五)五十頁 私家版 昭和六十年十

- 二月)。
- (9) 引用記事の記述により、天皇の死を暗示していると思われるが、新院の死を暗示しているのか、それとも安德天皇の死を暗示しているのかは不明である。以下、同じ記述のある屋代本、延慶本、長門本も同様である。
- (10) 屋代本のEの引用記事は、のグループの竹柏園本の記述と同様であり、二重暗示構造の形成に妨げがないと思われる。
- (11) 延慶本の二つの辻風、四部合戦状本の辻風をめぐる史実性について、水原一は「延慶本の二つの辻風は時期的に誤りではあるが、資料の形態的保存においては最も史実的であり、四部本は治承三・四年間の辻風と文芸的に知られた方丈記の辻風とを結びつけ、その記述も方丈記に全面的に依存した結果、僥倖にも史実に対して誤差の最も少ないものになった」と指摘した。(『延慶本平家物語論考』一一八頁 中道館 昭和五十四年六月)長門本は延慶本と同様である。
- (12) 野村精一は四部本巻四の翻刻に際しての解説で、「新帝即位、高倉宮、頼政訪問の記事に引き続く、いわば危機前夜の記事として書かれているものの如く、通行本と異なった意味で四部合戦状本作者の虚構と思われる」と述べている。(『文学』一九六六年十一月号 八三頁)『四部合戦状本平家物語評釈』(七)(二八頁 私家版 昭和六十二年十二月)は、野村が指摘する新帝即位から頼政挙兵に至る情勢に対する不吉な前兆を示す点について、延慶本・長門本の巻四の辻風も基本的に同様であると述べている。
- (13) 四部合戦状本に鼯の騒ぎの記事がないことに対し、議論がある。

佐々木八郎は四部合戦状本の形を古態と見るが、水原一はそれを四部本の略述性だと考える。(佐々木八郎『平家物語の達成』二二三頁 明治書院 昭和四十九年四月、水原一『延慶本平家物語論考』一二七頁 中道館 昭和五十四年六月)。私は、諸本の前後関係に立ち入らない。

(14) 本稿において、辻風の記事に持つ占文要素により、諸本を四つに分類してみたが、佐伯真一は、『方丈記』依拠の観点から、諸本における辻風の記述を、「巻三に『方丈記』依拠の明らかな記事を置く語り本・盛衰記、巻四に諸本中で最も密接な『方丈記』依拠を示す記事を置く四部本、その双方の位置に『方丈記』の依拠の顕著でない記事を置く延慶本・長門本」との三者に大別する。(『平家物語遡源』六一頁 若草書房 一九九六年九月)。

主指導教員(鈴木孝庸教授)、副指導教員(舩城俊太郎教授・荻美津夫教授)